方向

第一〇四号　一九八九年一〇月一日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

めぐりあい

1989.9.21. 視覚障害者協会で

原田憲雄

一、はじめに

ご紹介いただいた原田憲雄でございます。皆さんのほとんどの方が、わたしとは、これが初めての出会いだろうと思います。話の題の「めぐりあい」は、「出会い」とよく似ているのに、今日ではあまり使われないようです。よく使われるほうを使わずに、はやらなくなった「めぐりあい」のほうを題に選んだのは、次のような理由によるのです。「出会い」は、ただぶつかるだけですが、「めぐりあい」のほうは、やはりぶつかるのですが、ぶつかるについていろいろ原因や条件があった。その原因や条件のめぐりめぐった結果としてぶつかった。という気持のこもった言葉なのです。だから「出会い」には、初めてぶつかっただけの単純さがあり、「めぐりあい」のほうはよくいえば奥ゆきが深く、悪くいえばまわりくどい。そのまわりくどさが嫌われ、単純でドラマチックなものに人気が集まる、というのが「めぐりあい」がすたれて「出会い」がはやるゆえんです。

わたしの一日は、仏様の前でお経を読むことから始まります。お経は、ご存じのように、お釈迦さまの教えを集めたものです。お釈迦様の教えはたくさんありますが、その理論的な面を突き詰めてゆきますと、二つの原理となるのです。一つは、「すべてのものは変化する」という教えです。どんなものでも永遠不変ということはな

く、良いにせよ悪いにせよ、移り変わる、というのです。二つは、「すべてのものは関係しあっている」という教えです。木枯紋次郎というヤクザは「あっしにゃあ、関わりのねえことでござんす」と、タンカを切りますが、あれは誤りで、なんでも互いになんらかの関係があるというのです。この関係しあっていることを「因縁」とか「縁起」とか申します。これをもっと砕いていえば「ゆかり」です。なんでも互いになにがしかの関わりがあるとすれば、突然ぶつかった相手とも、ぶつかるについての原因や条件があった、「ゆかり」があったことになり、「出会い」であるようにみえても、実は「めぐりあい」であった、ということになりましょう。そんなわけで、初めて出会った皆さんにする話の題を「めぐりあい」としたのです。

わたしは今年、満七十になります。百歳以上の方が三千人を越える今日の日本では、わたしくらいで年寄り顔はしていられません。しかしそうはいっても、七十年の間には、いろいろな人、さまざまの物や事柄に、めぐりあい、それらの人々や、物事に守られてきたはずですから、印象の深かったことの幾つかをお話いたします。

二、編み笠をかぶった人

わたしが生れたのは、大阪府堺市で、そこに数え年の八つまでおりました。近くに「大寺さん」とよばれる寺があり、境内にはいつも、鯛焼きとか、七味とうがらしとか、蓙の油などを売る商人が露店をひらいていました。わたしはそういうものを見るのが大好きで、ひとりで出掛けていっては、いつまでも見ていました。あまり毎日遊びほうけているので、「子とりが来て、遠いところへさらってゆくぞ」などと脅かされはしましたが、そのころは子供が行方知れずになったり、殺されるというようなことは、ありませんでした。

五つの年、父に連れられて、和歌山県に行ったことがあります。そのとき急に鼻の調子が悪くなり、お医者さんに見てもらいましたところ、鼻の奥から新聞紙のまるめたものが出てきて、びっくりしました。それで思い出したのですが、大寺さんで、石燈籠にのぼって、蟇の油の口上を聞いていて、転げ落ち、鼻血を出して泣いたのを、蟇のおじさんが、新聞紙をまるめて油をちょっと塗って、血どめに鼻に詰めてくれたのを、忘れてしまっていたのでした。半年くらいは詰まっていたようです。

大寺さんとは反対のほうの町外れに、町の人の近寄らない畑があって、そこへはいつも、煉瓦いろの着物をきて、虚無僧のような編み笠をかぶったおじさんたちがやってきて、耕していました。わたしはそこへもよく行って、おじさんたちの仕事をじっと見ていました。休憩の時間に、そばへゆくと、仕事をしないで見ているだけのおじさんが、あっちへゆけ、といいましたが、毎日行くものですから、そのうちに叱らなくなり、煉瓦色の着物のおじさんたちとも、ときどき話をしました。母にあのあかい着物をきているおじさんは、どんな人なのかと聞いたことから、もう行ってはいけない、と止められ、そこが刑務所であったことを後に知るのですが、罪人として世の人から怖れられたその人たちの、静かなやさしい笑い顔がながくわたしの心に残っていました。

三、転　校

小学校の一年から二年に上がるとき、父が堺市から京都は西陣のいまの寺に転居しました。それにともないわたしも転校したのです。新しい小学校で、わたしがまずぶつかったのは、言葉がおかしいと、同級生から笑われることでした。生れた時いらい使ってきた言葉がおかしいなどとは、まったく訳の分からぬ、くやしさですが、

どうにもならず、そこで、差別ということや、言葉というものについて考えはじめたようです。

三年のとき担任が、松村千代という女の先生にかわりました。中年のきびしい婦人でしたが、正月に、友達にさそわれ挨拶にゆくと、先生は、大人の客にするのと同じように、ていねいに挨拶してくださり、それでなんだかうきうきしながら帰ったようにおぼえています。

中学に入って、大塚五郎という早稲田大学出身の先生に国語を習いました。文法の活用を毎日暗唱するのですが、できないと鋭い関東弁でぼろくそにやっつけられます。あまりにつらくて、なんど中学を止めようと思ったかしれません。しかしそれで止めた者はひとりもいなくて、わたしも止めるわけにゆかず、おかげで文法の活用は身についてしまいました。この先生には、卒業後も、いろいろなことでご指導を受けました。

四、得　度

わたしは寺で生れ、寺で育ちました。しかし、兄がいましたので、その兄が坊さんになって父の後を継ぐものとばかり思っていたのです。それでも寺の子であるということで、友達から「坊主、坊主」といわれました。坊主というのは、寺の主という意味ですから、もとは別に卑しめる言葉ではありませんが、二十世紀の初めころから、相手を卑しめる差別用語のように変わってしまったことは、ご存じの通りです。兄はそれがよほどつらかったらしく、あるいはほかの理由もあったのかもしれませんが、中学一年のとき、どうしても商売人になりたいといい、家族や親戚の反対を押し切って中学を止め、大阪のある商店に勤めました。そんなことがあったので、早い目にという気持になったのでしょう。一九三二年に、父はわたしと次の弟を得度させました。得度というのは、

坊さんでない人を坊さんにする儀式です。こうして新米の坊さんになり、父のかわりに檀家さんをまわってお経を読むようになりました。

戦前の日本の家は、一般に貧しいものでした。戦後に生れた方には想像もつきますまい。ことにわたしの得度したころは不景気のどんそこでした。その景気の影響をもろにうけるのが西陣の織物業者です。小学校も出ないうちから男の子は奉公に出され、女の子は十三か四になると売られるのです。西陣には五番町という遊廓がありました。わたしの近所の娘たちも何人かそこへ売られて働いていました。寺の檀家も貧しい家庭が多かったので、檀家まわりをするということは、そういった貧しい家庭の裏側までいやおうなく見て歩くということで、紅おしろいをつけ、きれいな着物をきているうつくしい遊廓の女の人たちが、笑顔のうしろにどんなにつらい運命をかくしているのか、といったことも、知らなければならなかったのです。

路地の奥に、さらに路地があり、そのどんづまりの家にゆくと、おじいさんと、まだ小学校にも上がらない女の子が二人っ切りで住んでいる。昼間はおじいさんは働きに出ます。わたしがゆくと、ちいさな女の子が、わたしがお経を読んでいるあいだに七輪で湯を沸かし、お経が終わると、お茶を出してくれる。帰る時には、戸口まで出てきちんと挨拶するのです。豊かで、社会的な地位の高い檀家もありましたが、そういう家庭だのにかえって風義がよくない、といったことも見聞きしました。このごろは何でも環境のせい、社会のせいにして、自分の子供が悪いことをしても、学校の先生の責任だという親が多くなっているようですが、路地のまた路地の奥でも、きちんとまっすぐ生きている人々がいて、こういう人たちとのお付き合いのなかで、お経を心をこめて読むこと

を学んでいったのだと思います。

五、大　学

中学を卒業して、竜谷大学の予科にはいりました。わたしの寺は日蓮宗ですが、日蓮宗の大学は東京にしかありません。そこに入るのが、いわば筋道ですが、わたしの父の経済力では、とてもできないことでした。竜谷は真宗の大学で、日本全国の真宗の寺の子がきていましたが、近畿地方の真宗以外の寺、たとえば京都の仁和寺、滋賀県の石山寺、奈良県の法隆寺や唐招提寺や薬師寺の弟子たちといった連中がたくさん来ていて、いろんな学生と付きあうことができ、さまざまな立場や考えかたに揉まれ、自分の宗旨の大学にゆくより勉強になったように感じます。しかし大学時代に学んだいちばん重要なことは、「大学」というものはいったい何なのか、ということが、わたしなりに掴めたことだろうと思います。その考えを申しますと、「大学」というのは、ひとが自分の生き方を見つけそれを育ててゆくところだ、ということです。例えば、中村さんという人がいて、そのひとが自分の生きかたを見つけたなら、中村さんは「中村大学」を自分の上にみつけたことになり、それから一生かけて「中村大学」を育てつづけるのです。では、世間でいう大学、たとえば京都大学とか慶応大学とかは、何か、ということになりましょうが、ああいう大学は、中村さんが「中村大学」を建設するために、場所や道具を比較的よい条件で提供するところなのでしょう。椅子は、椅子として使うものですが、喧嘩の道具とする人もいるものです。そこらの事情に自覚がないと、何とか大学という建物を通り過ぎて、卒業証書という紙切れはもらってきたが、いっこうにその人にはちゃんとした生き方が分かっていない、その人の大学がその人の上に建立されて

いない、ということになりましょう。その反対に世間のいわゆる大学ではないところで、自分の大学を建立している人もたくさんいます。わたしの友人の森田曠平君が、そのひとりだといってよかろうかと思います。

森田君は、「院展」に属する日本画家で、葉書や切手のデザインもてがけていて、いまではたぶん「大家」とよばれているのだろうと思います。かれは、むかし京都市長だった人の孫で、わたしより三つ年上です。中学の三年のとき胸を悪くして、二年間休学し、わたしが四年に進んだとき同級になったのです。十代で三つも年が違うと、大人と子供みたいなもので、付きあいにくいのですが、そのうちにどちらも文学や美術に興味をもっていることが分かり、親しくなりました。かれは美しい形のものを自分の手で造りたいと目指していました。学校に出ても病気がちで、卒業はしたが、上の学校へ行くのは無理なので、画家になることにして、洋画の先生についていました。そのうち陶器をやりたくなり、専門の先生に弟子入りし、土をこねる仕事から学びはじめました。ところがこの仕事もかれの病気にはよくないのです。そう分かったときのかれの失望ぶりは見るもむざんなものでした。だが嘆いていてもどうにもならない。また絵を描くほうにもどるのですが、洋画ではなかなか食べて行けません。ゆたかな家庭でも、いつまでも親の厄介にはなっておれない。そこで特定郵便局をやりながら日本画を勉強することにし、準備をはじめました。これがまた大変です。局を開いてからも、戦争ははげしくなり、やがて敗戦をむかえ、肝心の絵のほうに力を割くことができません。とうとう、郵便局の株を人に譲って横浜にゆき、そこで絵の勉強一本に運命をかけるのです。絵を描いて食べて行くということは、当時の日本ではなはだ困難なことでした。けれどもかれは病弱の身に鞭うって、こつこつと勉強を重ね、日本画として独特の世界を築

き上げたのです。かれは、いわゆる学歴としては中学を卒業しただけですが、自分の手で美しいかたちを造るという森田大学を、みごとに建立したのです。画家としてはもとより、文学にくわしい点でも、いまのいわゆる大学の教授のなかにいれても、ひけをとるまいと、わたしは信じています。

六、戦　　争

大学の本科を来年の春には卒業という年に、太平洋戦争が始まり、わたしたちは三カ月繰り上げて十二月に卒業し、つぎの年の二月には軍隊で、兵隊としての訓練を受けていました。初年兵時代にいろいろ苦しいことはありましたが、誰もがしたことで、そこでのいじめ話はいわゆる兵隊物語などでうんと紹介されています。そうして戦前の軍隊がすべて悪かったというふうな語り方をされることがありますが、何にでも悪いことばかり、良いことばかりということはないものです。その良かったことをすこしお話しておきましょう。あれほど教育に熱心な団体は少ないのではないでしょうか。演習などには、始めから審判をたくさんつけておき、演習がすむと、すぐ審判の批評を集めて、講評をやるのです。疲れ切った身には、つらいものでしたが、真剣に聞いていたら、ずいぶん勉強になったろうと思います。階級のうるさいところですが、何か新しい知識や技術を身につけてきた者は、たとえ一等兵であっても講師として招いて、将校の集まりで講義をさせる、ということがよくありました。わたしのいた連隊は、意地の悪い連中もいましたが、連隊長が思いやりの深い立派な人で、それが連隊全体の気風になっていたようです。しかし、個人としての軍人がいくら良くても、軍隊が戦争の道具であることは、どこの国においても間違いなく、戦争になれば、何百人何千人という人を皆殺しにもし、殺されもするのです。現に

わたしの入営した連隊は、後にビルマにゆき、ほとんど全員戦死します。わたしは偶然、事務的な仕事にまわされ、ビルマにはゆきませんでした。そののち衛生隊という負傷者救助専門の部隊に転属し、出征しました。このとき、門司で輸送船に乗るのですが、二つの船に分れました。わたしの中隊は、初め「ハワイ丸」という船足の早い船を割り当てられ、喜んでいましたところ、出発の直前「江の浦丸」というぼろ船に乗り換えることになります。みんながっかりしていましたが、その夜、敵の潜水艦に襲撃され、ハワイ丸などは魚雷が命中して轟沈し、江の浦丸は辛うじて逃げ、衛生隊ではわたしたちの中隊だけが、台湾にたどりつきます。台湾では花蓮港、台北、新竹、台東などに駐屯しますが、空襲を受け何度か狙い打ちされました。これもあやうく助かって、敗戦を迎えます。まあ、そういっためぐりあわせで、軍隊に、軍人として、四年もおりましたが、人を殺さずにすみました。人を殺さなかったのも、殺されなかったのも、運命、としか言いようがなく、違った場面にあてはめられていたら、命令にそむいても人を殺さずにすんだかどうかは、あの時代のあの軍隊のなかでは、なんともいえないでしょう。わたしは自分の受けためぐりあわせを感謝していますが、心にもなく人を殺さなければならなかった人の非運に対しては、涙を流さずにはいられないのです。殺された方々に対しては、もとより言うまでもありません。

名前が変わっても、ほんらい軍隊であるものは、今日以後も、戦争となれば、あまり変わりはないでしょう。軍隊は国民を守るためのものだと、擁護する人がいますが、むかしの軍隊もたてまえは同じだったのです。いざという時、軍隊がどれほど国民のひとりびとりを守ってくれるか、守れるか、すこぶる疑問です。かつての軍隊経験者であり、いまの軍隊を冷静に眺めている者としては、そう考えざるを得ません。

七、らいを病む人

「らい」とよばれる病気があります。わりあい感染しにくい伝染病で、いまでは治療法もわかり、全治した人も多いのですが、「ブロミン」という薬剤が知られるまでは、難病とされ、皮膚症状がひどく、体が腐ってゆき、失明したりして、それが遺伝だと誤解された時代もあり、患者だけでなく、家族まで、社会から差別されていたのです。いまでも、その差別観がなくなっているわけではありません。わたしの弟の原田禹雄は、歌を作る友人をゆかりとしてらい病学を専攻するようになりましたので、その話をいたします。

わたしは、中学を卒業したのち、さきにお話した森田曠平君に誘われて、これまたさきにお話した大塚五郎先生をお訪ねし、ふたりで先生の短歌の弟子になり、先生が作品を発表しておられる『水甕』という雑誌に、わたしたちも発表しはじめました。この雑誌に長島愛生園の入園者も会員としておられました。戦後、わたしはこのひとたちと文通するようになったのです。そのころ医学を勉強していた弟も、かたわら短歌を作り、『水甕』にも発表していました。すると長島の歌人の壱岐耕さんから、弟あての手紙がきました。「わたしたちは暇なものだから兄さんに手紙をどんどん出すのだが、集中すると、返事をくださるのも大変だろうから、あなたに出すことにしました」といった言葉をそえて。こうして弟も、長島の人々と文通するようになります。一九五〇年には、春にわたしが、夏には弟が、長島を訪問しました。その時のことを弟が文章に書いていますので、すこし長いのですが、読むことにいたします。

（私達一家は、三人が歌を作っておりましたため、愛生園の人々は、わたしを「ハラダさん」とよぶわけにも

ゆかず、必然的に「ノブオさん」とよぶことになりますが、これがまた非常な親しみをおぼえるようすがとなりました。ことに、壱岐さんとは、もっとも頻繁に文通しておりましただけに、まるで家族や親戚の人と一緒にいるような気持でした。しかし、さすがに最初は、その外見にたじろぐ思いでした。毛のない頭、白く濁った角膜、短い指、嗄れた声、低い鼻、包帯をまいた手足。どれひとつとっても、この世のものではないようでした。しかし、話しはじめると私はすぐ、壱岐さんの心とふれあうことができました。…十年のあいだ、全身に包帯をまいて、風呂にも入れなかった壱岐さんが、プロミンのおかげで、傷もほんのわずかになって、風呂に入れるようになったときいて、私は薬の偉力を、医学の力を実感しました。

宿舎に帰る君を送りきて夜のふけし患者境界線にまた暫く話す

このときの壱岐さんの作品であります。当時は目に見えぬ境界線があり、それが病人と一般人とを隔てておりました。その目に見えない壁は厚く、今日では考えられないほど厳しいものでした。それを踏み越える人もありませんでした。たとえば、予防着の上に坐って歌の友人たちと話しあうのですが、そこへ鍋がもち出されます。あけてみますと、中に急須や茶碗が煮沸消毒されたままで入っておりました。私がそのなかから茶碗と急須をとり出して、自分でお茶を入れるのです。清潔不潔の区別を、入園者自身が、そこまで気を使っておられたのです。…私が長島の友人を知り、〈愛生園園長の〉光田〈健輔〉先生を知ったのちも、らい医学を専攻しようと決心するまでには、なお数年かかりました。時々長島へ行って、歌の友人たちと話しあいました。壱岐さんは、私がらいの医者になることには反対でした。医者として、私がらいに理解をもってくれるだけでいいので、むしろ、ら

いにとらわれないで、のびのびと自分の望む道を歩んでほしい様子でした。わたしが壱岐さんを知ったことで、らいに進むのであれば、心ぐるしいといった気持でさえあったようです。私には、壱岐さんのその深い気持がよくわかりました。わかりましたが、私は自分の意志で、らい医学を専攻することにしました。…昭和三十二年二月、壱岐耕さんが急逝されました。療養所へ私が赴任すれば、幻滅を感ぜられるのではないかと、つねに私のことを心配しておられたと、奥さんから聞きました。兄と共に、壱岐さんの歌集『黒薔薇』を編集しました。…昭和三十四年十二月、長島の友人、キリスト者であり純粋な詩人であった志樹逸馬さんの死をきかねばなりませんでした。そして『志樹逸馬詩集』を、兄とともに編集しました。この二冊の本は、私たちと長島の友人たちとの友情の記念として、今も大切に保存しております。…　私は、らいを病む人々との出会いが、病人としてではなく、友人として、そして共に詩歌を作る仲間として知り得たことを、幸せであつたと思っております。病気を越えて、まず人間として、作品を通じて互いに知りあうことができたのであります。〉

弟はいま、同じ長島の光明園の園長をしております。わたしたちが訪ねた時には舟で渡らねばならなかった長島に、今年の春、橋がかかり、だれでも歩いて行き来ができるようになりました

八、『めしいのひじり』

最後に、目の不自由であったお坊さんの話です。お坊さんの名は鑑真。だれもが和尚（わじょう）という尊敬の称号をそえてよんでいます。和尚は、今から一三〇〇年ほど前に中国で生れました。日本からの留学生に頼まれ、道を伝えるために、日本に渡る決心をしました。ところが邪魔が入り、頼みにしていた弟子たちには死なれ、

十二年に五回も失敗しましたが、志を曲げず、七世紀の中頃、やっと日本にたどりつき、奈良にゆき、人々を導いたのです。律宗本山の唐招提寺はこの和尚によって開かれました。

わたしの友人の赤谷明海君は、この寺で修業した人で、竜谷大学での同級です。戦争中は胸がわるかったのに、召集を受け、中国のあちらこちらの陸軍病院をたらいまわしされ、死にそうになりながら、敗戦の次の年に帰国しました。唐招提寺で執事をやっているとき、『めしいのひじり』という本を書きました。「めしいのひじり」とは「視覚障害者であるすぐれた坊さん」という意味で、本は鑑真和尚の伝記です。和尚は「大仏開眼」という劇などで有名になりましたが、三十五年前には、あまり知られていませんでした。この和尚のことを、赤谷君が奈良の盲学校の校長中村芳郎先生に話したところ、目の不自由な人たちへの励ましになろうから、点字本の原稿を作ってください、と頼まれました。当時、赤谷君は、公私ともにいろいろ困難な問題をかかえていたのですが、その合間あいまに、苦労して書き上げたのです。これはやがて点字の本になり、盲学校の生徒さんたちに愛読されたと聞いています。赤谷明海君は、三年前の一九八六年九月十八日に満七十歳で亡くなりました。

さて、『華厳経』というお経には、善財という童子が文殊菩薩に教えられ、五十五人の人々や神々に次々にめぐりあい、教えを受けて菩薩の修行をする物語が、記されています。五十五人のなかには、日本でいえば芸者さんにあたるような職業の婦人も含まれています。この物語は、こどものころからの「めぐりあい」を大切にして、どんな人からでも学ぶ気になれば、人生の教師は、いつでも、どこにでも、いることを、示されたものではないでしょうか。わたしがめぐりあった人々の話を、これで終わります。ご清聴ありがとうございました。

重陽の節句と菊慈童

1989.9.15.　原田　慶

菊慈童は七百年生きて、童子のままだったという。千年だともいわれる。

中国、周の穆王（ぼくおう）の侍童。罪を得て南陽郡の酈（れき）県に流され。その地で菊の露を飲んで不老不死となったと伝え、この名がある。

能の〈菊慈童〉は、慈童が酈県山に流罪になった時に、王から『法華経』の妙文を枕に記して賜わったが、その妙文を菊の葉にうつしたところ、葉からしたたる水が、不老不死の薬となり、それ以来数百年間、少しも年をとらなかった。それから七百年たって、魏の文帝の臣下が、酈県山の麓から湧き出る薬水の川上を見て参れという宣旨をうけ、山奥に入り、菊の咲き乱れる仙境で、この慈童に出あうという話である。

森田曠平さんの画に菊慈童（一九六八年）がある。それはほんとうに童子として描かれている。しかしその知的ではればれとして自信に満ちた顔はどうだろう。見ているうちにふと若きジュピターという思いがした。右手に大輪の菊をかかげ、ゆったりと着た小袖、うしろにその裾とひもが菊の花びらのように美しくたたまれている。右手上のほうに薬水の流れがある。わたしが見ていたのは、『三彩』の増刊「森田曠平」の白黒の図版だけれど、そのまま頁を先へ進めると、「雷電」（一九七三年）というのがあり、菊慈童とはからだの向きが反対で、構図は似ている。左手にザクロを持ち、右手を膝に、口から稲妻を吐いている。ほかに、「松下童子」（一九六九年）として松の下に立つ慈童、「菊慈童」（一九七〇、一九七三年）など、年が進むにつれて、慈童の顔がするどく

なっている。

ジュピターはローマ神界の主神ユーピテル、ギリシャのゼウス、天空神で雷霆の神、雨や嵐などの気象現象の神だという。森田さんの菊慈童は、そういう力を感じさせるものを持っている。どの慈童も、あたまに二つ、髪を玉のように結んで飾りにしたとも見える角を持っているのは、菊の妖精を意味しているのだろうか。能の菊慈童からイメージして描かれたようである。「雷電」も能で、菅原道真の霊だという。

九月九日は重陽の節句だった。この日には、嵐山の法輪寺で重陽の節会がいとなまれた。参拝者は菊の花を供えて、無病息災、不老長寿やボケ封じを祈願する。わたしも菊の花を持って行こうと思っていたが、午後一時にまにあいそうになかったので、急いで何も持たずに行った。

バスを降りて渡月橋を西へわたり、すぐに裏参道の石段を上がって寺に着くと、家からちょうど一時間、法要が終わるところだった。そのあと、一時三十分から能〈菊慈童〉が奉納される。本堂に上がると、本尊の虚空蔵菩薩のお厨子だろう、黒い扉がぴたりと閉ざされている。法要の時は開けられていたのかもしれない。お参りの人のほとんどは中・老年の女の人だが、夫婦の姿もいく組か見える。法要の終わるのを外で待っていた外国の人達も上がってきた。それほど広くない本堂の中央で「菊慈童」が演じられるらしくて、「ここが舞台になりますのであけて下さい」と灰色の作務衣の若い坊さんが言っている。

本堂の向かって右端に菊慈童の人形が飾ってある。髪はしゃぐまの形だが、顔は目のぱっちりした現代風の子どもである。どこかで出あったことのあるような、考え深げな美しい顔をしている。手に朱黄（ぐみ）袋を持ち、

まわりの柵の四隅にも茱萸袋がかけてある。菊の花を供え、菊の形をした生菓子や果実なども供えてあった。虚空蔵菩薩のまえにも菊が供えられ、宝塔の乗っている大台のまえの両脇に、菊の造花が三本ずつ立ててあって、花の上に、赤、黄、緑、紫などの色のついた綿が、丸いせんべいのような形にして、それぞれ三枚ずつ乗せてある。法要に参っていた人達は、供えられたたくさんの菊を、一本ずつ分けてもらって持って帰るらしい。どれも黄菊だったが、あれをもらって帰って酒に浮べ、菊酒を飲むのだろうか。とにかく不老長寿祈願、ボケ封じである。わたしの横に、もうほとんどボケはじめているお婆さんが、自分の娘や息子の嫁や孫などという女性達にかかえられて参ってきて、しんどそうに、ふうふう、はふはふ、言いながら、くにゃんと座っている。傍にすわった息子の嫁らしい人が、「お婆ちゃん、まっすぐ前を見てみ、ほれ、能を舞わはるんえ、毎年見せてもろてるやろ、お婆ちゃん好きやろ、ほれ見てみ、菊慈童さんが出てきはったえ、な、あっち、まっすぐ前を見てみ」と、いっしょうけんめいに言っているが、お婆さんは、嫁さんの顔ばかり見てふうふう言っている。わたしも横にいて何だかはらはらする。嫁さんは、お婆さんに、なんども話しかけながら、わたしのほうを見て、困ったように「えへへ」と笑った。わたしも仕方なく笑ってしまった。その人達は、風呂敷につつんで茱萸袋をたくさん持っていた。わたしも本堂に上がらせて頂くのだからと思って、茱萸袋を一つ買った。それは紅絹の袋にお香をふりかけた綿をつめ、菊と秋グミの造花が美しく挿してある。全体の大きさが十五センチほどのもので、とてもいい香りがしていた。

せまく感じられるけれど十畳くらいはあるのだろうか。本堂の中央のところを舞台にして、正面入口のしきい

にそって地謡三人、笛、小鼓、大鼓、太鼓の順に七人がならぶ。地謡のなかの一人は西洋人だった。紋付のゆきが短くて腕がにゅっと出ている。手は袴の中にいれてきちんと正座している。菊慈童の足もとが、本堂へ入る時などあぶないので、舞台まで案内して来たひとも西洋人だった。

「金剛流は外人さんがようけ習てはりまっせ」

と誰かがささやいている。日本の古典芸能を西洋の人に見せてもらうというのも妙な気持ちがしたが、こだわっても仕方がない。今日は、慈童が菜酒を飲んで「楽」を舞うところだけ演じられるらしい。

見物は六十人くらいだろうか、そんなに多いわけではないが、今年の残暑は格別で、わたしの横のお婆さんはふうふう言いながら「あつい、あつい」と言っているように、わたしには聞こえる。たいていの人は扇子を使っている。お婆さんは黒っぽい長袖にずぼんをはいていたので暑かったのだろう。わたしは風をおこすような物を持っていなかったので、お婆さんに何もしてあげられなくて残念だった。そのうちに謡が聞こえて能がはじまり、あたりがしいんとした。

慈童は金銀を織り込んだ菊の模様の装束を重ねて、大きな袴をはき、しゃぐまのようなばさりとした髪をつけている。場はせまく、少しでも出すぎると宝塔の置いてある大台にぶつかる。両横には見物がすわって見上げている。入り口のほうには囃子の人達がならんでいて、天井から大きな提燈が下がっている。そのわずかの空間をぎりぎりまできっちりと使って、あの装束で舞う。動きを押しとどめるエネルギーは強く激しい。面の中は、自分の息と汗で目もあけられないだろう。わずかに面の下に出ている顎のあたりから玉の汗がしたたっている。そ

れでも澄みとおった慈童の面は微笑んでいる。舞の姿は一瞬もくずれることがない。唐扇をしずかに動かして音もなく舞はつづく。笛や鼓の音も吸収してしまって、菊慈童の姿だけがそこに見えるという不思議な世界だった。何時間も過ぎたような気がしたが、一時間もたっていない。

終りになって慈童は帝から頂いた枕を拝し、帝の長寿を祈って謡う。そして地謡で、

鄰県の山路の菊水汲めや掬えや飲むとも飲むとも尽きせじや尽きせじと菊かき分けて山路の仙家に其のまま慈童は入りにけり。

と慈童が舞台から去ると夢から醒めたようにほっと息をついて、みんなが拍手を送る。地謡の人、囃子の人が入ってゆく。これで重陽の節会は終りである。

わたしはもう一度、虚空蔵菩薩を拝んで、本堂を下りた。虚空蔵さんは知恵、功徳の広大なることあたかも虚空を蔵するがごとくである故にかく呼ばれる、とある。渡り廊下のところで、地謡の人に慈童のことなど熱心にたずねている人があった。先のお婆さんの車椅子を、孫らしい若いひとが本堂の前へ廻してきて、他のひと達がお婆さんを抱きかかえて乗せようとしている。

作務衣の坊さんにたずねている人もある。

「祇園祭りの菊水鉾に乗ってはる菊慈童さんは、ここの本堂にいはる菊慈童さんどすか」

「ああ、菊水鉾にも乗ってはりますな、けどあれはここの菊慈童さんとはちがいます。あれは菊水鉾の菊慈童さんで、ここのとは別です」

「そうどすわなあ、この菊慈童さんは、おまつりがすんだらまた来年までちゃんとしもとかはるんですわなあ」

「そうです、そうです、今年はこれで終りです」

重陽の節句というのは、陽數の九が重なる節で、中国では三月三日の上巳（じょうし）、五月五日の端午、七月七日の七夕、九月九日の重陽などの節は、この世とあの世の交通が開かれる日として特別に警戒された。これらの節日には人間の生死の交替が最高潮に達して、一時に多量の生死が起こると信ぜられたので、その死を避け、生を迎えるために、いろいろな行事が営まれたということである。

また菊酒を飲み、茱萸を挿すことは、中国の汝南に恒景という人があって、費長房という師に学んでいた。あるとき師が景に今年九月九日、おまえの家に災難がある。急いで紅い袋を縫って茱萸を入れ、みんなの腕にかけさせて、山に登って菊酒を飲ませれば、禍を免れるだろうと言った。そのとおりにしたところ、家にいた家畜がみんな死んで、景の家族は助かった、という伝説によるもので、日本でも平安朝の延暦時代のころから宮中などで、茱萸袋を帳に吊し、安全を祈るようになったそうである。

グミは、梅雨の頃にできるものは粒が丸く、下を向いてなるが、秋グミは粒が細くとがっている。種ばかりで果肉がうすく、形が弾丸のように飛びやすく見えるので、悪鬼をはらうとされたとも言われるが、民間薬としても実や根がつかわれる。

九月八日は白露だった。この夜、菊の花に着せ綿をして、たまった露を飲めば長寿を得るといわれるのは、菊慈童の伝説によるものである。これらの伝説などをみんな合わせたものが、今日の重陽の節会で、ことに、法輪

寺の御本尊虚空蔵菩薩は菊の花を愛されるので、菊の節句ともいわれる重陽の節会がいとなまれるということのようである。

わたしが初めてこの寺へ来たのは十三詣りの時だった。母の妹である叔母に連れてきてもらった。帰りに、石段のしたの石橋を渡りきるまでは、振り返ってはいけないということだが、思い違いをして、渡月橋をわたってしまうまで振り返らずに頑張ったことを思い出す。振り返ると、智慧を返してしまうと言われているからである。智慧を頂いたのかどうかわからないが、今日は菊慈童さんに会って、茱萸袋も手に入れたので、あとは菊酒があれば延命長寿もかなうかもしれない。わたしに百歳まで辛抱できるだろうか。百何歳かの長寿のお婆さんにテレビのニュース・キャスターが、長生きの秘訣をたずねたら、「秘訣？　そんなもの何もありはせん、寿命じゃ」と答えられたと聞いた。長生きはしようと思ってできるものではないだろう。百年も生きることのできた人にわたしは心から感嘆する。

菊慈童は千年も生きたという。能の菊慈童はすべてを超越して悠然の境が感じられるが、森田さんの菊慈童は、月夜の童神、鶴に乗る仙人童としても描かれ、人間の時間の外でひたすら遊ぶ魂の世界であるように思う。

森田さんは書いておられる。

菊のエキスを吸って幾百年、いや千年以上を生きる美しい仙童。酒の好きな私にとっては繰り返し描いても描き切れぬ何かが残る題材である。

重陽の節会が終ってからも、まだ去りがたく、境内のあちこちに佇み、塔を見上げたり、遠い景色を眺めたり

している人々から抜け出して、わたしはひとり長い石段を下りて、振り返らずに石橋を渡った。嵐山は常と変らぬ観光客の雑踏であるが、渡月橋はさすがに秋を感じさせる川風が吹いて、やっとわたしを現実の世界に引きもどしてくれた。

皮膚の金色も散乱し －法華経巡礼 36－

1989.9.29. 原田憲雄

3-2. さて、長老シャーリプトラは、そのとき世尊に偈で話しかけた――

驚くべきことには、偉大な導師よ、大歓喜が生じました、雷のようなお声を聞いて。
どんな疑問ももはやなく、わたしは成熟したのです、この無上の乗のなかで。（1）
驚くべきはスガタのお声、衆生の渇える欲望や燃えあがる痛みを断ち、
汚れの尽きたわたしにも悩みはすべてなくなった、雷のような声を聞いて。（2）
昼の休みに散歩して、森林、庭園、樹木の根もと、
山や洞穴をたのしみながらも、このような思いに沈んだのです。（3）
ああ、わたしは、邪悪な心でみずからを欺いていた、同一の、汚れなき法にいながら。
これではおそらく、三界で無上の法を説かないだろう、未来の時にも。（4）
三十二相はわたしから散乱し、皮膚の金色もまた散乱した、

力も、解脱も、すべてむなしい、同一の法にいながら。ああ、わたしは愚かだった。（５）
偉大なムニにそなわるというすぐれてめでたい吉相の八十随好、
非類ない特質の十八不共法も散乱した、ああ、わたしはおのれを欺いて。（６）
世界を憐れみこの世においでのあなたにお会いしてからは、昼の休みもさまよいながら、
思い煩う、ああわたしはおのれを欺き、障害のない、不思議な智慧から、離れていると。（７）
夜も、昼も、過ごしています、師よ、たいていはこのように思い煩い。
まずは世尊に尋ねしたい、落ちこぼれたのでわたしはあろうか、あるいはそうでないのかと。（８）
このように思い煩い、ジナの王よ、夜も昼も、自分の時間を過ごすのです。
ほかの多くのボサツたちを、世界の導師が称讃されるのを見たために。（９）
また聞いたから、仏の法をじつに多くの意味こめて語られるのを、
ジナが覚りの壇上で、思量を超え、微妙であり、汚れなき知を確立されて。（１０）
わたしはかつて妄見を固執して、異教徒に尊敬される遊行者でした。
そこでわたしの意向を知り、師は、妄見から救うため、涅槃について語られた。（１１）
妄見の過誤からすべて離れ、存在の空なることを、わたしは知り、
そこでわたしは涅槃したと思ったけれども、それはまことの涅槃とは言えないのだ。（１２）
最上の衆生なる仏となり、人・天・ヤクシャ・ラークシャサに敬われ、

三十二相を具備したまえたもうと、完全な聖者となるのである。（一三）

atha khalv āyuṣmāñ śāriputras tasyāṃ velāyāṃ bhagavantam ābhir gāthābhir adhyabhāṣata ||

āścarya-prāpto 'smi mahā-vināyaka audbilya-jāto imu ghoṣa śrutvā /

kathaṃkathā mahya na bhūya kā-cit paripācito 'ham iha agra-yāne ||1||

āścarya-bhūtaḥ sugatāna ghoṣaḥ kāṅkṣāṃ ca śokhaṃ ca jahāti prāṇināṃ /

kṣīnāsravasya mama yaś ca śoko vigato mi sarva śruṇiyāna ghoṣam ||2||

divā-vihāraṃ anucaṅkramanto vana-ṣaṇḍa ārāma 'tha vṛkṣamūlam /

giri-kandarāṃś cāpy upasevamāno anucintayāmi imam eva cintāṃ ||3||

aho 'smi parivañcitu pāpa-cittais tulyeṣu dharmeṣu anāsraveṣu /

yan nāma traidhātuki agra-dharmaṃ na deśayiṣyāmi anāgate 'dhve ||4||

dvātriṃśatī lakṣaṇa mahya bhraṣṭā suvarṇa-varṇa-cchavitā ca bhraṣṭā/

bala vimokṣāś c'imi sarvi ṛiñcitā tulyeṣu dharmeṣu aho 'smi mūḍhaḥ ||5||

anuvyañjanā ye ca mahā-munīnāṃ aśīti-pūrṇāḥ pravarā viśiṣṭāḥ /

aṣṭādaś 'āveṇika ye ca dharmās te cāpi bhraṣṭā ahu vañcito 'smi ||6||

dṛṣṭvā ca tvāṃ loka-hitānukampī divā-vihāraṃ parigamya caikaḥ /

hā vañcito 'smīti vicintayāmi asaṅga-jñānātu acintiyātaḥ ||7||

rātriṃ-divāni kṣapayāmi nātha bhūyiṣṭha so eva vicintayantaḥ /
pṛcchāmi tāvad bhagavantaṃ eva bhraṣṭo 'haṃ asmīty atha vā na veti //8//
evaṃ ca me cintayato jinendra gacchanti rātriṃ-diva nitya-kālam /
dṛṣṭvā ca anyān bahu bodhisattvān saṃvarṇitāml loka-vināyakena //9//
śrutvā ca so 'haṃ imu buddha-dharmaṃ saṃdhāya etat kila bhāṣitaṃ ti /
atarkikaṃ sūkṣmaṃ anāsravaṃ ca jñānaṃ praṇeti jina bodhi-maṇḍe //10//
dṛṣṭī-vilagno hy ahaṃ āsi pūrvaṃ parivrājakas tīrthika-sammataś ca /
tato mama āśayu jñātva nātho dṛṣṭī-vimokṣāya bravīti nirvṛtim //11//
vimuṃcya tā dṛṣṭi-kṛtāni sarvaśaḥ śunyāṃś ca dharmān ahu sparśayitvā /
tato vijānāmy ahu nirvṛto 'smi na cāpi nirvāṇāṃ idaṃ prabudhyati //12//
yadā tu buddho bhavate 'gra-sattvaḥ puras-kṛto nara-maru-yakṣa-rākṣasaiḥ /
dvātriṃśatī-lakṣaṇa-rūpa-dhārī aśeṣato nirvṛtu bhoti tatra //13//

※九月一二日、弟原田禹雄が第七歌集『無明の樹』を、京都市西京区大原野上里勝山町八－一三　南島社から刊行しました。一九八七年八月以降の作品を集めています。

※前号正誤　七－一一頁「越山考」　角衛→角栄　二四頁一一行　「妙」であったのだ。→「妙」であり、　一五行　聞く者にさえ→聞く者にも